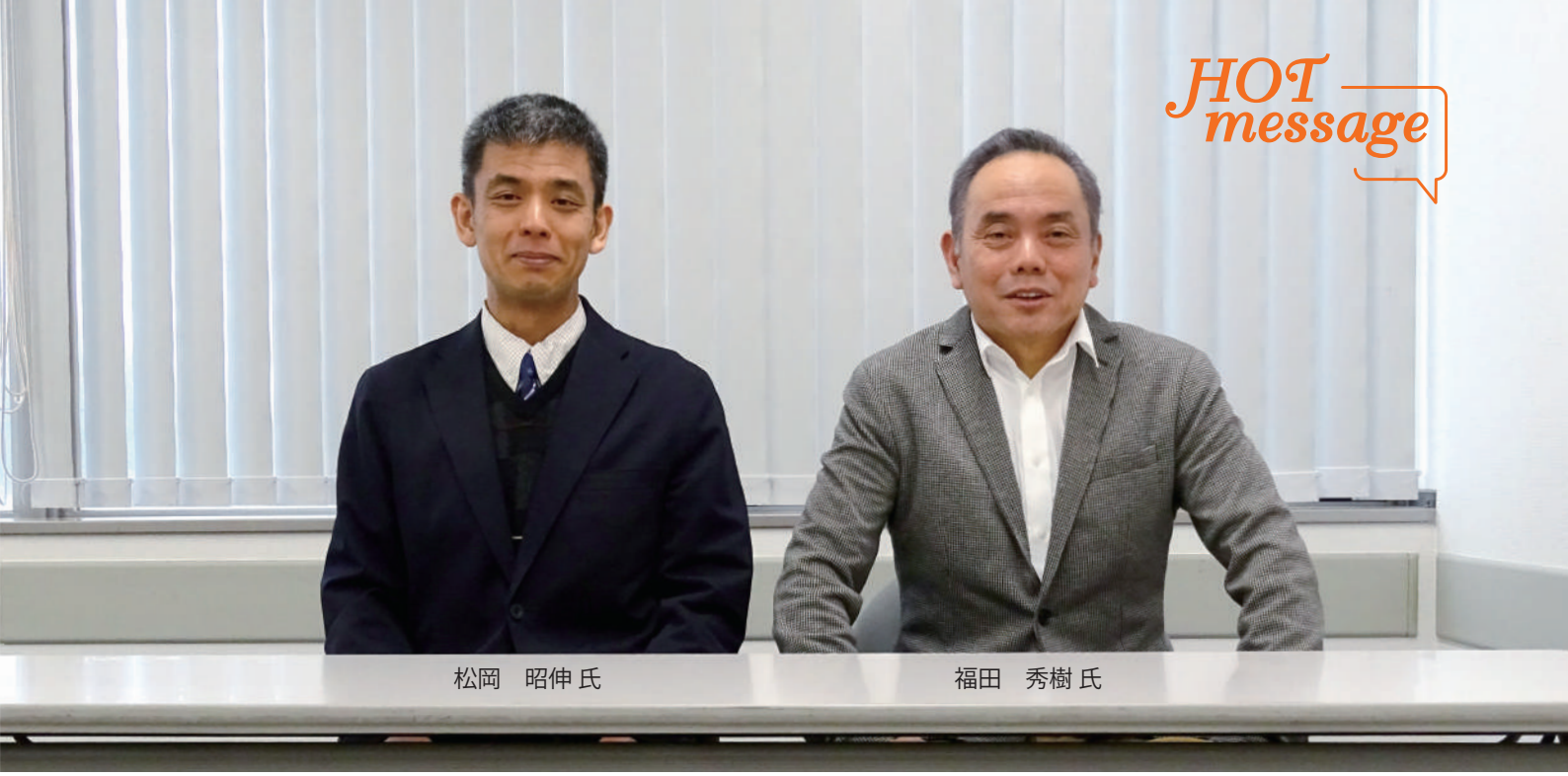


松岡　昭伸 氏　　福田　秀樹 氏

―― 対談 ――

『障がい者問題委員会の活動』

【司会】 広報・情報化委員会編集長
㈱イトフク／代表取締役
松岡　昭伸 氏
（中讃第２支部）

【出席】 障がい者問題委員会委員長
㈲河商仮設資材／代表取締役
福田　秀樹 氏
（高松第７支部）

委員長拝命後の最初の取組み

司会　早速ですが福田さんは、いつごろから障がい者問題委員会として活動していますか。

福田　約８年前から障がい者問題委員会に関わらせていただいています。５年前から委員長を拝命しております。

司会　福田さんが委員長になられて、今日までの間に努力されたこと、こんなことに力を注いできました等をお聞かせいただけますか。

福田　努力と言われるとそこまでではないようなところがありますが、やってきたことの一番は委員会の認知度を高めることです。

何をおいてもまずは我々の活動を皆さんに広く知っていただくことなので、それに努めてきました。

そういう意味で、前委員長から私が委員長を引き継いだ時にまず取り組んだのが、昔の養護学校、今は特別支援学校といいますが、県の特別支援学校や香川大学附属の特別支援学校に在籍するお子さんたちの実習を受け入れるための実習マップづくりです。

これが私の最初の仕事というかやったことです。７年前に事務局員と一緒に、実習を受け入れていただくために20社ほどの企業を回りました。しかし当時は、就職に向けた実習は受け入れていたのですが、短期の実習は受け入れてもらえませんでした。何度交渉してもそのハードルが高く、思うようにはいきませんでした。

その結果、私が委員長になる年にその取り組みは一度凍結することになりました。その後、委員長になって最初に取り組んだのがやむなく凍結した活動を教訓にしたブロックづくりです。

障がい者の方は地域外では困難になるので、地域を西讃・中讃・高松・東讃・小豆島の５つのブロックに

分け、年に一度何らかの交流を図ってきました。

これが活動の基本ですが、養護施設の子どもたちに夢を与えたいということで、3年ほど前から、施設の子どもたちと企業の経営者の方とのマッチングのようなことをしたり、昨年は藤田木工さんや、かねとうみらい塾さんが、ワークショップ形式で施設のお子さんたちや先生たちと活動を始めています。

司会　知名度を高めるというか、多くの人たちに知ってもらうための活動の一つは、実習マップにつながることですね。その他に取り組んでいることはありますか。

福田　障がい自体があまり理解されていないところがあります。身体とか知的という部分では何となくイメージが湧くと思いますが、精神とか発達等の部分になると理解が難しいところがあります。

昨年ですが、三豊支部との合同例会や、高松第1支部で、私どもの委員会の副委員長が報告させていただいたり、小豆島支部の例会に参加させていただくなど、障がいは多岐にわたっているので、それをまず知ってもらおうという活動を始めています。

ですから、障がい者の実習の受け入れをしていただければ、それはとても有り難いことですが、それだけではなく、「障がいって何だろう?」というふうに、障がい特性を知ってもらいたいということで話をさせてもらってきました。

障がいではなく個性

司会　ところで、障がい者を取り巻く現状は、どのようになっているのかを教えていただけますか。

福田　実は障がい者数は増えていますし、もしかしたらこれからは5人に1人ぐらいは何らかの障がいを抱えるような形になるのではないかと思われます。

生まれ持った障がいであったり、ネグレスト（4ページ※1）からくる精神的な障がいや、事故等で負う障がい、また高齢になってからの障がい等がありますが、障がい区分が増えたために障がい者が増えている部分があるようです。

司会　昔は怠けているとか、わがままだとか言われていたものが、実は発達障がいやコミュニケーションに問題があることが科学的にわかってきたことで、認識が変わってきたと思いますが。

福田　たしかにそのように見られていますが、実はそうではないところがあります。

例えば、さぬき市に引きこもりの人たちの支援をしているポレポレ農園さんというのがあります。

そこは、農業を通して社

会復帰のお手伝いをしているところですが、そこに通う人たちの約半数はアスペルガー（4ページ※2）だそうです。ただ、アスペルガーは発達障がいの中でもその他の部分になります。

アスペルガーの子どもたちはとても敏感でとてもナイーブで、ズバ抜けた能力を持った子が多いようですが、それだけに周囲から浮いた存在になりがちなようです。

引きこもりですが、40歳以上が約60万人、40歳以下が約30数万人で約100万人に達しています。一方で人材不足で海外からの労働人口が約120万人です。

引きこもりは障がいではなく個性だと私たちは捉えていくべきだというのが、委員会としての考え方のように思います。

司会　障がいではなく個性ですか。

福田　そうです。障がいではなく個性として私たちは捉えていく必要があるのではないかというのが、委員会としての考え方、見解かと思います。

企業に望むことは、働き方の多様性。

司会　よくわかりました。続いて中小企業に対してこれからどういうことを期待されますか。言い方を変えると障がい者問題に対して、中小企業はどういうことができるかですが。

福田　それはもういろいろとありますが、今は不安のほうが大きいわけです。先ほどもお話しましたが、障がい者が5人に1人とか5人に2人、こんなふうに増えているそうです。

だいたい30人の学級で2人といわれていますが、実際は5人はいるだろうというわけです。その子たちが今から10年後には社会に出ます。

そういう時代になると企業はどうやって人材確保をするのか、そんな懸念があります。そこで私どもの委員会で提案しているのが、短時間労働や仕事の切り分けです。

発達障がい等をあくまでも個性と受け止め、その人ができる仕事をどうやって切り分けていくか。

短時間労働は、1人が20時間ではなく3人で20時間でもカウントしてもらえるような仕組みづくり等、同友会全体としての政策提言が、これから必要になってくるのではないかと受け止めています。

司会　同友会全体としての政策提言をというお話が出ましたが、これからの同友会、あるいは障がい者問題委員会に何を期待しますか？

福田　障がい者問題委員会については、人間尊重の経営を目指そうというイメージなので、そこを一丁目一番地として専門委員会の中で土台というか基礎にならなければならないのではないか。そんな議論をよくします。

そういう意味でも、委員会の中での立ち位置を明確にすることが求められています。地域や会社、人やモノに対しての「愛」が委員会として一番大事なことだと思うので、それを土台に次期委員長には活動していただきたいと思います。

最後に

司会　最後にお聞きしますが、私の普段の生活で障がいを持った方に接する機会はほとんどありません。おそらく私どものような会社がほとんどだと思います。そういう会社に対して、こうしてほしいとか、もっとこういうところを見てほしいなど、ありますか。

福田　それは全くありません。というのは、実は自動ドアやバスの乗降口など、便利なものは全て障害からきています。例えば、製造業であれば、スパナの形もそうですし、トイレ掃除も同様です。そしてそれは、どこの会社でも使えるものなのです。整理整頓も然りで、社員さんにとっては参考になるものです。

司会　そういうことを私同様、一般企業の方は知らないと思うのですが。

福田　たしかにそれは大事なことだと思います。委員会としてはとくにPR活動は行っていませんが、コツコツと活動をしていく中で、お付き合いをしていただける企業が5年間で10社になったわけですから、ほんとに地道に情報発信を続けるしかないと思っています。

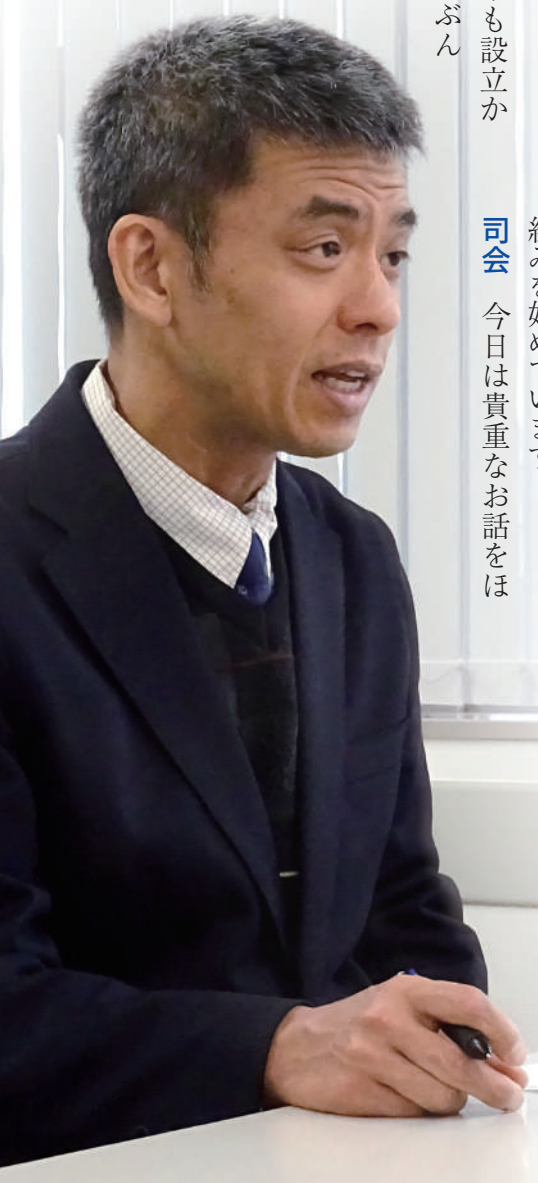
　委員会のメンバーも設立から7年を経て、ずいぶん増えていますから、私としては力強いものを感じています。

　来期についてですが、例えば大学の先生の力をお借りして、アンガーマネジメントを自分たちでまずやっていこうという話が出ています。

　また、これからは企業の経営者の方や社員さんも障がいについて学ぶ必要があります。そのためにジョブコーチ（4ページ※3）の研修など、社会的障害や会社の中の障害も障がい者問題の一つの問題として取り上げていくことが議題に上がっています。

　とくに、社員さんとのコミュニケーションで悩む経営者の方がおられることも事実なので、それぞれのケースの関わり方を外部の方、プロに教えてもらうための部会を設け、委員会の課題として取り組みを始めています。

司会　今日は貴重なお話をほんとうにありがとうございました。



……

※1　ネグレスト

　児童虐待、障がい者虐待、高齢者虐待、患者虐待のひとつ。

※2　アスペルガー

　アスペルガー症候群。コミュニケーションや興味について特異性が認められる先天的な発達における障がい。

※3　ジョブコーチ

　職場適応援助者。障がい者やその家族に対して、職場適応に向けたきめ細かな人的支援をする専門職。